

令和5年9月6日

南の風特集Ⅱ 男子バスケットパリオリンピック出場

南部地区ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

特集Ⅰの続きです。

渡邊雄太選手は、今回のW杯における男子アカツキジャパンの戦い方について、次のように語っています。「普通にきれいなバスケットをしたら、良い勝負はできても勝ち切るまではいかない。言い方は悪いけど、ギャンブルみたいなバスケットをしないと強い相手には勝てない」

日本チーム内では「勝つならこれしかない」という共通理解が徹底していたのではないのでしょうか。迷いのない戦い方が史上初のW杯3勝につながったと言えます。

日本が世界と戦うための方向性が見えた今回のW杯だったと思います。その土台には過去の試行錯誤があります。現在につながる男子代表の強化が実質的にスタートしたのは、日本協会の内紛と混乱により、国際試合に出場できない資格停止処分が解除された2015年です。その後、2017年にはアルゼンチン出身のフリオ・ラマス前監督が招かれ、世界基準を目指しました。

強豪のアルゼンチンで監督を務めるなど、国際経験豊かなラマス氏の戦い方は、トム・ホーバス現監督とは対照的でした。そのアプローチは、「世界との戦いでは75～80点が日本の得点力の限界」という考え方から逆算し、失点をいかに抑えるかというものでした。

具体的には、試合を遅いペースで展開して相手の攻撃回数（ポゼッション数）を抑え、ロースコアに持ち込むことや、今大会で172cmの河村や167cmの富樫が務めた司令塔のポイントガード（PG）には、別のポジションからサイズの大きな選手をコンバートし、速さで優位に立つよりも守備面での不利をなくすことを狙いました。好不調の波が激しい3Pシュートを主体とする現代表チームの戦い方とは違い、「正攻法」で世界との差を埋める戦略でした。

ラマス氏の下で、日本は13年ぶりのW杯出場、そして実力不足で未確定だった開催国枠での東京五輪出場を果たすなど、世界への一步を踏み出しました。

しかし残念ながら、2019年のW杯では5連敗、東京五輪では3連敗と大舞台での結果には結び付きませんでした。

渡邊、比江島、富樫、馬場ら当時を知るメンバーが、今大会ではリスクを承知で勝ちをつかみにいくホーバス監督のスタイルを信じたのも、世界で通用しなかった悔しい経験があったからこそと言えます。

日本が自らの手でつかみ取ったパリ五輪の舞台では、W杯よりさらに厳しい戦いが待ち受けています。32チームが出場したW杯とは違い、五輪の出場枠はたったの12チームです。それだけに、予選グループの段階から世界のトップ10に入る強豪国との対戦が組まれる可能性が高いのです。

また、選手選考という点では、今回のW杯では選外となったジェイコブス晶（NBA グローバルアカデミー）や金近廉（千葉ジェッツ）ら有望な若手も期待されており、W杯メンバーであってもパリ行きが確約されているわけではないのです。河村が「豪州やドイツのような高いレベルのチームとの対戦が待っている。その高いレベルでバスケットができるように、僕自身も1年間しっかりと日々成長していきたい」と意気込んだように、ここから1年で個々の選手たちが何処まで成長するかも注目です。

パリ五輪へ向けて、男子日本代表候補選手の戦いが始まります!!